



文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム
IB 教育アドバイザー 好事例共有シリーズ Vol.1



ちいさな自己表現のたね

2025年7月11日
国際バカロレア PYP 認定園
町田こばと幼稚園 園長 神藏かおる

2025年6月。例年にはなかったお天気がたびたび起きているようです。たとえば、観測史上もっとも気温が高い6月。とても梅雨時期が短いなどなど。地球に起こっている変化とあわせて、当然人間も変化していくかなければならないと感じます。そうでなければ、生き残ることができないかもしれません。

幼児教育の場でもそんな人間を育てるべく様々な変化が進行中です。「子どもの自主性を重んじる」「探究心を育む」など、聞こえの良いキヤッチフレーズと、現場の文化の変化の足並みをそろえるのに、なかなかの時間と体力を要しているのではないでしょうか。

従来の日本の幼児教育の良さを残しながら、持続可能な人と地球のいとなみに貢献できる教育を実施するために「国際バカロレア教育」の枠組みは非常に有効です。町田こばと幼稚園は2017年に国際バカロレア教育の候補校になってから、少しずつ学びの内容を更新してきました。

ここではそれらの学びのなかから、2025年一学期に行った年中と年長のユニットを紹介します。年中は「Sharing the planet」、年長は「How we express ourselves」です。それぞれの学校で大切にしていることがあるかと思いますが、町田こばと幼稚園では、卒園までに「いのち」とはどんなものか、発達段階にあわせてぼんやりとでも概念化し、自分が生きているということに気づいてほしいと願っています。

○「Sharing the planet」では年中児が植物を育てながら様々な角度から「いのち」に触れます。散歩や園内にある身近なものを、「生きているもの」「生きていないもの」に分類し、その理由を共有することから始まります。「ボールは自分でころがるから生きている」「お花は動かないから生きていない」など様々な発言がありますが、学びが進んでいくうちに、意見は変わっていきます。

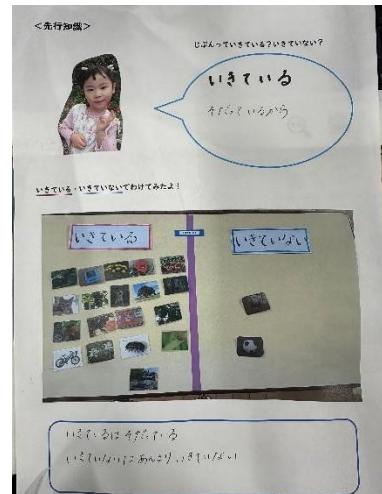
○セントラルアイディア

植物は地球上の生命を維持し、私たちの生活の中で役割を果たす

○探究の流れ

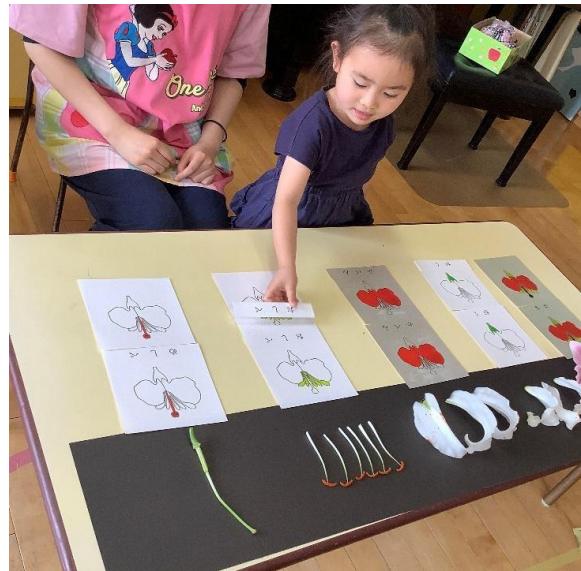
- ① 身近な植物 ② 植物を育てる ③ 植物と人との関わり

○特定概念 特徴・変化・関連



○付加概念 類似点・成長・影響

○学習者像 知識のある人・信念をもつ人・考える人



○ A T Lスキル

- ・リサーチ（データの収集および記録（録音、絵を描く、写真撮影）：詳細を観察して気づきを得るためにすべての感覚を用いる）
- ・思考（分析する：注意深く観察する、特有の性質を見つける）



探究の流れのなかで、植物の観察だけでなく、市場からとれたての魚を持参し、目の前でさばいて「いのちを頂く」活動もあります。子ども達から、はじめは「くさい」「かわいそう」などと声が出ますが、魚を実際にさわり、自分と同じ「目」や「口」があることや「心臓」の存在を知ると、やがて感謝の気持ちでおいしく頂くときには「ありがとう」「おいしい」などと発言が変わっていきます。

自分が成長することを知っている子ども達は、実際に植物を育てながら植物の変化や、変化に必要な要件などを整理していきます。ゆりの花の解剖では、「めしへ」や「おしへ」、その後にできる「たね」の存在を知り、様々な現象を自分にも置き換えて、自分の「健康」や「いのち」の概念が少しづつ形成されます。

興味深いのは、自動運転で走る車を「生きている」と分類した子どもです。生き物の特徴を探究した子ども達が人工知能との向き合い方をどのように構築していくのか、新たな探究の芽が見えたような気がしました。

○「**How we express ourselves**」では、PSPE リトミックの教員とのコラボレーションで、運動会で町田こばと幼稚園伝統の「八木節」を踊る活動や、自分で音源から身体表現を作り出す活動などを行います。インプットした情報をもとに、瞬時に身体を思うように動かすアウトプットは、幼少期から経験を重ねることが重要です。幼少期の身体表現は、子ども達が今、ここに、生きている喜びの表現そのものではないでしょうか。

○セントラルアイディア

友だちと協力することで幅広い表現が期待できる

○探究の流れ

- ①身体を使った表現 ②みんなで表現 ③表現を作り出すこと

○特定概念 特徴・関連

○付加概念 表現・コミュニケーション・協力

○学習者像 挑戦する人・振り返りができる人・信念をもつ人



○ A T L スキル

- ・コミュニケーション（聞く：他者のアイデアを能動的に、敬意を示して聞く）
- ・自己管理（心の状態：粘り強さ：課題において粘り強さを発揮する。）
- ・社会性（対人関係：グループで共同して遊ぶ：共有し、交替する）

まずは自分の身体の部分を自由に動かすことから始めます。ひとりでアルファベットなどを作った後、グループで星を作る際には、必ず誰かが主体的に全体を俯瞰で見て、指示を出します。このような活動は特に英語講師とのコラボレーションで、ボキャブラリーが増える傾向があります。日本語でリードする時間が圧倒的に長い日本の一条校幼稚園で、英語に付加言語として触れていく場合は、身体を動かしたり、体験を通して理解した概念を英語におきかえることで、子ども達が新たなボキャブラリーを獲得できるのです。



運動会の演目については、昨今クラス全員で行う活動に様々な意見がありますが、町田こばと幼稚園の子ども達は、「八木節」の独特的の節や竹を叩く音などに2歳のころから親しみがあり、年長になつたら踊れるということに憧れを抱き、また年長児は誇りをもって演技に取り組みます。演技に対して自分達でたてた目標の振り返りを重ねながら、自分自身の改善点やクラス全体の改善点なども意見を出し合う姿がみられ、共通の目標にむかって努力し達成する喜びを味わいます。実際に、ひとりひとりバチを持って竹をたたき、その音を揃えようとしても、ただ言われた通りの“ふり”を覚えるだけではできません。仲間と呼吸を合わせようという気持ちがあって、その意味を理解して初めて可能になるのです。

様々な音源から好きなものを選び、集まったグループで音源から連想するものを表現する活動は、子ども達の個性やクリエイティビティが発揮されます。まずは印象を絵に描き、そこからストーリー仕立てにするグループや、ダンスにするグループと様々です。



○音源から「サメ」を連想したグループの表現⇒この時の子ども達は自由に思い描き、それを表現するために何が必要か考え、発表したものにフィードバックをもらう時ですら、どれも本当に生き生きとしています。肯定的なフィードバックや、アドバイスを受け入れて更にブラッシュアップしようとする姿も見られます。

予め設定された「正解」に近づくことを目標としない活動は、一件難しそうですが、やがて伸びやかに世界のなかで自己表現をしていくだろう彼ら、彼女らの原体験となり、その喜びの根を張っていくのだろうと確信しています。